

# トイトイトイ! toi toi toi!

ステージはそこにある

vol.02  
2024.03  
飯田文化会館  
情報誌

Iida Cultural Hall  
Information  
Magazine

## ふるさとに「落語」の灯を

市民落語鑑賞会 おいでなんしょ寄席

この地だからこそできる表現を 演劇集団「演劇宿」

INTERVIEW 「芝居が好き」その思いを原動力に

AI IDA わたしの視点

芸術としての価値を届けたい  
和太鼓で世界中のつながりを創出

EVENT REPORT

地域の宝を守り、伝え、つなぐために  
「伊那人形芝居保存協議会」研修会



## 追悼



故 橘左近さん

(令和5年12月12日逝去)

芸者が弾く三味線が流れる小粋な町、飯田市扇町に生まれたあなたは、  
小1から落語が大好きになり、  
寄席通いの末に寄席文字の書家として大成しました。  
ふるさと飯田から声が掛かってみこしに乗せられ、  
「おいでなんしょ寄席」という祭りを始めたのは、  
あなたが全盛期を迎えていた平成元年でしたね。

以来、この地に名人上手、名だたるスターを集めては、  
東京の落語ファンが羨む企画を打ってきました。

令和5年までの夢のような35年間を通して私たちは、  
落語は会話と同じく、演者と観客のキャッチボールであり、  
笑いは文化のバロメーターであること、  
文化の薫り高い飯田で聞く落語は最高に面白いことに気がきました。

あなたはいなくなりましたが、祭りは終わらせません。  
生まれてから大火で焼き出されるまでの12年ほど過ごしただけの飯田に  
尽くしていただいたご恩も絶対に忘れません。

今頃あなたは初期の世話人たちとあの世で再会し、小さん、米朝、志ん朝、  
小三治師匠あたりが出る豪華な寄席を開いていることでしょう。  
我々はしばらくこちらで頑張り、徐々に合流させてもらいます。

「さんまは目黒に限る。落語は飯田に限る」

あなたが乗れなかったリニアが開業する頃にはこう言われるよう、  
戻っばしよりで踊り続けます。

おいでなんしょ寄席第4代実行委員長  
河原 俊文



【橘左近さん前列左から3人目】

### INDEX

#### CurtainCall

市民落語鑑賞会  
おいでなんしょ寄席

#### Toward the next stage

演劇集団「演劇宿」

#### AIDA 私の視点

和太鼓奏者 アート・リー

#### REPORT

「伊那人形芝居保存協議会」  
研修会

#### REPORT・INFOMATION

新しい文化会館整備検討状況  
令和6年度 飯田文化会館事業計画





# おいでなんしょ寄席

## ふるさとに「落語」の灯を 市民落語鑑賞会 おいでなんしょ寄席

Oidenansyo Yose

[文=平松優子 写真=中島拓也・南信州新聞社]

### やっぱり落語は生がいい

令和5年12月6日(水)、飯田文化会館で開かれた「第44回 おいでなんしょ寄席」。コロナ禍を経て、4年ぶりの開催となった同寄席には三遊亭好楽さん、桂文珍さん、桂宮治さんの人気者3人が出演しました。

初登場となった桂宮治さんは古典の名作「時そば」を披露。抑揚の利いた口調と、情景が浮かぶ繊細な描写で聴衆を惹きこみます。次に努めるのは三遊亭好楽さん。自然体ながらも人を惹きつける空気感を纏い、端正な語り口で古典の「胡椒の悔やみ」を聴かせました。一方、桂文珍さんは、まくらから飯田のシンボル・りんご並木の話題に触れて会場を盛り上げ、AIの進化により落語が忘れられてしまった未来を舞台にした自由闊達な現代落語を披露。拍手やどよめきが随所に起こり、ホールは笑いに包まれました。

### おいでなんしょ寄席の歴史

昭和が平成に変わったばかりの平成元年5月、飯田市公民館で開催された「立川談志独演会」。同寄席の歴史はここから幕を開けました。開催の立役者となったのは飯田市扇町生まれの寄席文字書家・橘左近さん。日本テレビ「笑点」の題字やカレンダーの企画制作のほか、噺家の系図研究をライフワークとして続けるなど落語界に多大な功績を残した人物です。

「信州の小京都に落語の灯を!」。そんな



熱意を胸に当時の、幼なじみの萩元邦人さん、南信州新聞社・篠田鞠彦さんの二人が口火を切り、賛同した飯田文化会館、飯田屈指の落語好きで知られる片桐啓さんらをメンバーに、昭和63年実行委員会が結成。左近さんの人脈を元に、江戸、上方から来飯する落語家の顔ぶれは地方公演では類を見ないほどの豪華さで、地域に「笑い」の文化を根付かせると共に「おいでなんしょ寄席」は全国屈指の地方寄席として業界からも一目おかれる存在へと成長したのです。

前述した44回日の寄席を終えたわずか6日後、橘左近さんは天国への旅路につきました(令和5年12月12日・89歳)。しかし、左近さんが残してくれた文化の灯はこれからも明るくふるさとを照らし続けます。

# Interview

おいでなんしょ寄席  
第4代 実行委員長  
前 実行委員長

## おいでなんしょ寄席 第4代 実行委員長

河原俊文 さん

かわらとしふみ ●昭和43年、喬木村生まれ。南信州新聞社勤務、三遠南信Biz編集長。仕事を通じて落語に興味を持ち、20代前半から各地の落語会へ足を運ぶ。30代前半、先輩のあとを継ぐ形でおいでなんしょ寄席実行委員に。副実行委員長を経て、令和5年、第4代実行委員長に就任



「第44回おいでなんしょ寄席」は、私にとって実行委員長という大役を拝命する大きな節目の席となりましたが、集まったお客さんにとっても特別な席であったと思います。コロナ禍の3年間のブランクを経て「果たしてお客さんは笑ってくれるのだろうか」と舞台袖を行き来しながら、正直、考えていました。ところがふたを開けてみれば、会場を包む大きくキレのある笑い声。それで途絶えるような文化ではなかったということですね。

落語はもともと東京や大阪の芸能であり、この地に古くから根付いたものではありません。しかし来場者の笑いは「地域の文化の有りよう」を表すバロメーターであり、落語会はこれを確認する意味でも貴重な機会です。この見えない宝を守るため、お

いでなんしょ寄席を続けていく事がこれからの我々の使命だと感じています。

また、もうひとつ目指すのは、落語を通じた地域アイデンティティーの確立です。象徴的な事として、飯田は有名な古典落語「文七元結(ぶんしちもつとい)」のゆかりの地であることが挙げられます。これを地域資源と捉え、元結職人や水引業界、有識者とも連携しつつ、相撲や歌舞伎とも関係づ



けながら関係人口作り、PRにつなげられたらと考えています。

時代は移り変わり、この地域も変化し続けます。リニアが開業すれば東京が近くなり「東京へ落語を聴きに行けばいい」という声も出てくるでしょう。しかし、飯田で聴く落語が一番面白い。ドカーンと笑いがきて、その面白さを皆で共有できる喜び。それが感じられるからこそ、飯田で落語会を続ける意味があるのだと思います。

目指すのは「飯田市民『目黒のさんま』殿さま化計画」。有名な古典落語「目黒のさんま」のオチは「サンマは目黒に限る」というものですが、飯田下伊那の皆さんが「落語は飯田に限る」と思わず吹きたくするような近未来を目指して活動していけたらと思います。

## Interview 三遊亭 好楽 さん

木久扇(木久蔵)さんと一緒に、初めて飯田を訪れたのは30年前。私の大好きな左近師匠が、私のことを好きでね。なにかと声をかけてくれるから、飯田にはちよくちよく足を運ばせてもらっています。

毎回驚くのは楽屋に置かれているネタ帳の中身。「え、この師匠がこの噺したの



## 大好きな左近師匠、大好きな飯田のこと

!?」「すげーな、聴きたかったな」てことが往々にしてあるんです。つまりね、飯田ならこんな話がやれるんだってこと。落語には誰にでも面白く伝わりやすい噺もあれば、良い噺なだけけど大衆受けしないものもある。普通の会場ならついてこれられないような噺も、ここ飯田の地では大先輩たちが披露しているんです。演目を見るだけで飯田の方の耳が肥えているのがわかりますし「すごいな。ここは落語が通じる貴重な場所なんだな」と改めて思います。

現在、落語界にいる噺家は上方と江戸を合わせて約800人。当然ながら上の方々はだんだん旅立っていくわけです。



かくいう私も77歳ですから、いわば昔の人。こんなにいいお客様に恵まれている場所なのだから、これからの「おいでなんしょ寄席」には、まだ無名でも才能のある若い噺家を呼び、発掘する場になってほしい。先輩としてそんなことにも期待しています。

## おいでなんしょ寄席 前 実行委員長 片桐 啓 さん

かたぎりけい ●昭和30年、豊丘村生まれ。仕出し・寿司専門店「片桐」代表。第1回から実行委員を務め、おいでなんしょ寄席のすべてを知る貴重な存在。平成15年に第3代実行委員長に就任、令和4年までの20年間、会の発展に尽力する



中学生のころから無類の落語好き。大学進学で上京してからは半蔵門の国立小劇場(当時)に毎月通ってね。「名人」と呼ばれる人らの古典を夢中で聴き続けてきた。若い時分のそんな経験で、聴く耳がずいぶん養われたと思う。

故郷に戻って30歳を過ぎたころ、持ち上がってきたのが「おいでなんしょ寄席」の企画。それ以前にも飯田で落語会の企画はあったらしいけど、こっちはなんてったって揃うメンツが段違い。1にも2にも飯田出身の左近師匠がいたから。これに尽きるよね。

振り返ってみればすごい話もあってさ。例えば第8回の「五代目桂文枝襲名披露公演」。仕掛けも大掛かりな「天神山」も見事だったし、その日は襲名披露の口上もあったから、実行委員も法被を着て後ろに並ば



せてもらって。あれは感動だったね。

もう一つは第3回の「柳家小三治独演会」。この師匠、まくらが長いことで有名なんだけど、実はまくら振りながら客の反応を見てるんだよ。この日やった「子別れ」は長い話だから、上段、中段で終わらせることが多いんだけど、見せ場になる「糸繰り」の仕草をした時に客席から拍手が起ったの。都会じゃ絶対ここで拍手は起きない。養蚕

が盛んだった飯田だからこそ、その見事さがわかったんだろうね。これで師匠の気分が乗っちゃって、上中下90分話して終電に乗れない人がいっぱい出たって笑い話。この日の打ち上げは普段飲まない師匠がコップ酒傾けてさ。「いやー。飯田はいい。お客さん良かった」てご機嫌で、それもうれしかったよね。ああ。でもこんなふうの一つ一つ話していったら話は尽きないからこの辺で。

自分にとってのおいでなんしょ寄席とは？そんな哲学的なことはわからない。「いい落語家さんと呼んで、地元の落語好きなお客さんに見せたい」という、会の趣旨にほれこんで支えてきた。ただそれだけ。だからこれからも動ける限りは携わっていくのが自分の使命だと思ってるよ。終わってからのうまい一杯を楽しみにね。

### 橘 左近さん 最期のコメント

郷里での落語会。なんとしてでも行きたい想いがいたしましたが、齢をとってからの体調とは全く予想が出来ぬもので、気持ちだけは飯田へ飛んでいるのに体が追い付かず、心ならずも不参という事になってしまった。情けない、実にくやしい思いが募ります。

「おいでなんしょ」という飯田言葉は深



い親近感をもって心に響きます。当たり前です。私の生まれた処です。そんな大切な処に落語が根付き、多くのファンに守られているなんて、なんてうれしくて素晴らしいことでしょう。

多くの落語家が飯田を訪れ、その感覚の新鮮さと感受性の鋭さを激賞しています。事実です。落語だけでなく芸能に対する心構えが他所とは違うと激賞してくれた人もいます。うれしい限りです。地方にありながら新感覚と深い愛情によって永年かかって育てられた飯田人の素晴らしい感覚だと感じています。豊かな環境を育て上げた先輩諸氏に対して深く感謝すると共に、これからの姿勢維持への努



力を惜しまぬことが大切だと痛感します。

長く落語の仕事が続けて来たが、いよいよ限界を感じる今日この頃、愛する郷土への恩返しとして、落語会開催の協力ができたことに感謝を込めて御礼申し上げます。



TOWARD THE NEXT STAGE >>>>>>

この地だからこそできる表現を

えんげきじゆう

演劇集団「演劇宿」

[文=平松優子 写真=中島拓也・飯田文化会館]

♪夕日さす 恵那のいただき よく見えて  
はては知られず 澄める西空

印象的なメロディーと共に耳に響くのは  
五七五七七の短歌。舞台上に映し出される  
文字映像と合わせて観客の心にスッと飛び  
込んできます。

令和5年10月28日(土)、泰阜村役場集  
会室で上演された「翔ぶ!～金田千鶴の生  
きた道～」コンサートバージョン。開演前か  
ら多くの観客が来場し、用意された100席  
はあっという間に満席となりました。

金田千鶴は泰阜村出身のアララギ派の  
歌人。明治35年に生まれ、結核を患い32歳  
という若さで亡くなるまでの間に831首の  
短歌を詠み、小説や散文作品を4篇残しま  
した。

「時代を代表する素晴らしい歌人であり  
ながら、出身地でも彼女を知らない世代が  
増えている。郷土の豊かな文化の礎を知っ  
てほしいという願いを込めて上演しまし  
た」と話すのは脚本・構成・演出を担当した  
ふじたあさやさん。この公演は平成14年に  
初演した舞台を、より伝わりやすいよう語  
りと歌を中心にアレンジしたもの。村の合

唱グループ「やまどりコーラス」の皆さんや  
村のお子さんらも共に舞台に立ち、短歌を  
メロディーに乗せて歌いました。また今回  
は、同舞台の曲を長年担当してきた作曲家  
の吉岡しげ美さんに依頼し、劇中歌をピア  
ノバージョンに編曲。「千鶴さんを身近に感  
じ、次代に歌い継いでほしい」との願いを  
込めて、舞台上演後、村に譜面が寄贈され  
ました。受け取った横前明村長は「素晴ら  
しい公演に心が震えた。大切に歌い継いで  
いきたい」と応え、会場には大きな拍手が  
響きました。

### 演劇宿のあゆみ

「演劇宿」結成のきっかけは、飯田文化会  
館で平成5年度から展開された市民構成  
劇創作事業「かごこし姫となかまたち」で  
す。市民がプロの指導や助けを受けながら  
2年間の歳月をかけて作り上げた市民  
ミュージカルで、日本演出者協会の理事長  
も務めたふじたあさやさんに脚本と演出を  
依頼。延べ200名が参加し作り上げた舞台  
は、5公演で約7千人の観客を集めるなど

大盛況のうちに幕を下ろしました。その後  
も参加者の熱気は冷めることなく「活動を  
継続したい」と願う市民と「地域の演劇の  
変革を図りたい」という飯田文化会館の思  
いが重なり「演劇宿」として活動を開始。ふ  
じたさんによる定期的な指導の元、アマ  
チュアながらも質の高い演劇制作が実現し、  
各地域で上演を重ね好評を博しています。

### 尊敬すべき先達の生き方に光を

地域に根差した演劇集団として、地元の  
人物・歴史を題材にした芝居を制作して取  
り組むことの多い演劇宿。地域との重なり  
を意識したのは、平成11年上演の「私が私  
と出会う時」がきっかけでした。作品の舞台  
は中国残留孤児の日本語学級。満蒙開拓  
団を多く派遣し、帰国者や当事者も多いこ  
の地での公演は緊張感溢れるものでは  
た「自分たちの問題をよく取り上げてくれ  
た」という観客からの感想が、地域に劇団  
があることの意味を考えるきっかけとなり  
ました。その後「地域の先達の生き方に光



を当てたい」と制作された初のオリジナル作品が「翔ぶ!～金田千鶴の物語～」です。病と闘いながらもひたむきに生きた彼女の生涯を鮮やかに描いたこの作品はメロディーと文字映像の両面から短歌を舞台化するという新たな試みも評価を得て、同劇団の看板作品となりました。

### 演劇宿のこれから

平成16年には第二弾として、飯田市に生まれ、島崎藤村の小説『破戒』のモデルと言われる大江磯吉の生き様を小説と関連づけた作品「夢・大江磯吉の」を上演。平成23年には三六災害50年シンポジウムおよび大河原床固工群直轄砂防事業竣工式において、三六災害の悲惨さを後世に伝える「演劇的記録 三六災害五十年」も上演しました。

そうした中、立ち上げから同劇団を牽引してきた小澤廣人さんが73歳で他界。令和4年3月、追悼公演として「翔ぶ!～金田千鶴の生きた道～」が20年ぶりに再演されました。



「これまで劇団を率いてきた小澤さんがいなくなってしまうことで、今後の劇団のありようについて悩む団員もいました。小澤さんがこだわってきた作品の再演を通じて思いを再度認識し、新たなステージへ進むための道標になれば」とふじたさん。公演後、千鶴役を演じた白井明美さんは「千鶴さんの生まれ育った地で、地元の皆さんと一緒にステージに立たせていただけてうれしかったです。千鶴さんも見ていてくれる、と思いつながり一生懸命演じました」とコメント。また、母親役の塩澤恵子さんも「千鶴さんの地元ということでお客さんたちが集中して観てくださっているのが伝わってきました」と目を潤ませながら話すなど、それぞれに思いの詰まった公演となりました。

地域に根差した活動で、飯田の地にアマチュア劇団による市民文化を实らせた演劇宿。小・中学生の劇団員も新たに加わり、この地だからこそできる表現を追求しています。結成から28年経った今も、熱い思いは変わることなく若い世代へと受け継がれているのです。

## 演劇宿の歴史

### 平成8(1996)年2月

市民創作ミュージカル  
「かごこし姫となかまたち」上演  
飯田文化会館(7公演)。終了後  
有志により「演劇宿」として活動開始

### 平成9(1997)年2月

演劇宿としての初公演  
「地べたっこさまやあーい」  
飯田人形劇場(6公演)

### 平成10(1998)年2月

「ベッカンコおに」  
飯田文化会館・東京前進座劇場  
(5公演)

### 平成11(1999)年4月

「私が私と出会う時」  
鼎文化センター(6公演)

### 平成14(2002)年2月・4月

「翔ぶ!～金田千鶴の物語～」  
飯田文化会館・泰阜中学校体育館  
(5公演)

### 平成16(2004)年12月

「夢・大江磯吉の」  
飯田文化会館(4公演)

### 平成23(2011)年1月

「夏の庭」  
飯田市鼎文化センター(4公演)

### 平成23(2011)年6月・12月

「演劇的記録 三六災害五十年」  
飯田文化会館・大鹿小学校体育館  
(2公演)

### 令和4(2022)年3月

「翔ぶ!～金田千鶴の生きた道～」  
20年ぶりの再演  
飯田文化会館(2公演)

### 令和5(2023)年7月・10月・11月

「翔ぶ!～金田千鶴の生きた道～」  
コンサートバージョン  
泰阜村あさぎり館・泰阜村役場  
飯田文化会館  
(3公演)



Interview 演劇集団「演劇宿」のみなさん

## 「芝居が好き」その思いを原動力に

[インタビュー・文=平松優子 写真=中島拓也]

座長 塩澤恵子 さん  
副座長 木下義美 さん  
団員 塩澤愛慈<sup>あんじ</sup> さん  
団員 塩原智子 さん

—皆さんが演劇を始めたきっかけは？

木下 私は社会人になってから芝居を始めました。地元のアマチュア劇団に所属していたころ「かごこし姫となかまたち」の企画が立ち上がったんです。オーディションを受け、小澤廣人さんと知り合い、それからずっと一緒に演劇活動を続けてきました。

塩澤恵子 私が初めて演劇と出会ったのは高校生の頃です。卒業後も地元のサークルで芝居を続けていましたが、結婚、子育てもあり離れてしまっ。「もう舞台に立つことはないだろうな」と漠然と思っていたときに「かごこし姫と仲間たち」の話を耳にしました。昔からふじたあさやさんのことは知っていたので「あのふじたさんが飯田に来て指導してくださるなんて！そんなこと本当にあるの!？」と衝撃を受けて。子どもたちがいる程度大きくなっていたこともあり、家族を説得して参加しました。



副座長・木下義美さん

塩澤愛慈 私は4年前、小学5年生のときに入りました。最初に妹がやっていて、妹やおばあちゃんが演じているのを見て楽しそうだなと思ったのがきっかけです。コロナ禍もあったので出演はまだ2回ですが、これからもいろいろな役に挑戦して、いずれは主役も演じてみたいです！

—愛慈さんは恵子さんのお孫さんなんですよ。

塩澤恵子 そうです。以前は娘も参加していましたが、結婚してこの子たちを生んで、今は愛慈とその妹が舞台に立っています。木下さんのお宅も、以前はお子さんとお孫さんが参加していたんですよ。

木下 親子や三代で参加している家族は多いですね。ほかにも二組くらいいます。

塩原 私はもともと裏方からのスタートでした。演劇宿の主宰者だった小澤廣人さんが飯田市民音楽祭協議会、飯田文化協会の事務局長をやっていたときに事務局員を務めていて。その関係で、小澤さんのやることは全てお手伝いするといった雰囲気になってずっと関わってきました。

—皆さん、どんな思いを持って活動を続けてきましたか？

塩原 「かごこし姫と仲間たち」の準備の際は、飯田文化会館を拠点に仕事や学校を終えた皆さんが続々と集まってきて、私たち裏方が作った夕食を食べて稽古に出ていく。そんな熱気のある毎日が続きました。そのころ、木下さんのお子さんはクーハンに



座長・塩澤恵子さん

入っているくらい小さくて。赤ちゃんから六十代の人までが一つの場所に集い、同じ目標に向かってそんなふうに熱く取り組めることってなかなかないですよ。そういう面白さに魅せられてしまったのかもしれない。

塩澤恵子 驚いたのは演者と同じくらい、裏方志望の方が多かったこと。私は舞台に立ちたいタイプなので「なんで？」と最初は理解できませんでした。でも、それぞれやりたいことが違うから面白いし、その力があるからこそ舞台ができる。そんなことを改めて感じられる機会になりました。

木下 続けてきた理由はそれぞれだろうけど、一つ言えるのはみんな「芝居が好き」ということ。その気持ちが最大の原動力ですよ。このメンバーも、最初は他人同士で集まってきたけれど、30年一緒にいるとお互いに…なんていうのかな、家族とも違う、特別な仲間になっているのは確かです。

一演劇宿では地域を題材にした作品に多く取り組んでいますが、演じる上での違いはありますか？

塩原 今回、千鶴役を演じた白井さんは千鶴さんの親戚筋に当たります。見る側も演



団員・塩澤愛慈さん

じる側も、思いが入るのは当然のこと。普通では考えられないこんなご縁があるのも地域劇団ならではのですね。

塩澤恵子 千鶴さんの母親役を演じさせてもらう中で「とてもいいお母さんだったよ」と話を聞く機会が結構ありました。親戚の方や本人をご存じの方がいる前で、いくら演技とはいえ嘘はつけませんよね。そういう意味で、覚悟を持って臨んでいる部分はあります。

一演劇宿の今後は？

木下 まずはこれからも長く活動を続けていくこと。そのためにも、仲間はどんどん募集したいです。

塩澤恵子 今、定期的に練習に参加しているメンバーは15人ほどですが、今回の千鶴さんの芝居でも、初演のときにお手伝いしてくれた方や、途中で関わった方たちに声をかけると「じゃあ、また一緒に歌おうかな」と参加していただける。延べ人数でいえ



団員・塩原智子さん

ば200名くらいが関わってくれているんじゃないかなと思います。

塩原 それぞれの演目に応じて、気楽に参加できるのも演劇宿のいいところですよ。

木下 ふじた先生が、演劇「塾」ではなく「宿」と名付けてくださった真意はそういうところにあるのかなと考えています。人生のさまざまな局面で、芝居と離れざるを得ないこともあるかもしれませんが、やりたくなったらまた戻ってほしい。そんなふうな門戸を開いた開放性は常に持ち合わせていきたいですね。

## Interview ふじた あさやさん

平成5年、現代人形劇センターの宇野小四郎さんからの紹介で、飯田文化会館の市民創作ミュージカル「かざこし姫と仲間たち」に携わり、それが飯田の皆さんとの30年以上に及ぶ長いお付き合いの始まりとなりました。

「翔ぶ!～金田千鶴の物語～」を書き上げたのは平成14年です。「地域に根ざした演劇宿オリジナルの作品を創りたい」という小澤廣人さんの熱意、そして僕自身もちょうど演劇宿のために脚本を書きたいと考えていたタイミングでもありました。



### ふじた あさや ● プロフィール

1934年東京生まれ。早稲田大学文学部演劇専修在学中に「富士山麓」を発表。放送作家を経て、劇作家、演出家として数多くの作品を手がける。日本演出者協会元理事長。アシデジ(世界児童青少年演劇協会)日本センター会長ほか

心を打たれたのは千鶴さんの短歌の素晴らしさ。彼女のような優れた歌人がいたことは地域の財産であり、それを皆さんと共有したいと思いながら書き上げたことを覚えています。初演から23年が経ち、千鶴さんのことを知らない世代も増える中で、台本に少し手を加え、理解しやすい形にアレンジしたのが今作のコンサートバージョンです。さらに今回は「住民の皆さんが千鶴さんの歌を口ずさめるような状況を作れないか」との相談を受け、シンガーソングライター・吉岡しげ美さんに劇中



ふじたさん(左)と、劇中の曲を手がけたシンガーソングライター・吉岡しげ美さん

歌のピアノバージョンの制作を依頼。結果、歌い継いでいくにふさわしい素晴らしい曲が完成しました。コーラスグループや学校での合唱など折々で歌い継いでもらえたらと思います。

飯田の演劇宿からヒントを得て、私も川崎市で市民劇団を立ち上げました。演劇宿と共に歩んできた歳月は私にとっても、地域における演劇の役割について深く考えさせられた貴重な日々となりました。これからも末永くこの活動が続くことを願っています。

## 芸術としての価値を届けたい 和太鼓で世界中のつながりを創出

[インタビュー・文=北林 南]

さまざまな視点から見た飯田の文化を紹介するコーナー。  
今回は飯田市を拠点に世界各地で和太鼓の演奏やワークショップを開催している「和太鼓TOKARA」のリーダー、アート・リーさんに、飯田市での活動や文化について感じる事、未来への想いなどを聞きました。



— プロの和太鼓奏者として活動を始めた翌年の2005年から、外国の方も和太鼓をより深く学べるワークショップ「伊那谷和太鼓コース」を開催されていますが、どういう思いで始められましたか？

当時私が感じていたのは、世界で和太鼓をやっている人たちが深く学べる機会があまりなかったということ。英語が話せる私なら、外国の方でも和太鼓を深く学べるチャンスを作れると思い、「伊那谷和太鼓コース」を始めました。初回は2カ国から18名の参加で、英語と日本語で1週間指導しましたが、その間は私の指導だけではなく、日本各地の和太鼓チームを訪問して指導を受けました。それから毎年開催しています(コロナ禍は除く)。

— 今まで参加された方は、どのような反応ですか？

「指導がわかりやすく、難しい曲も演奏できるようになってありがたい」といった声をいただいています。期間中の宿泊先として阿智村の旅館の方にも協力いただいています。参加者の皆さんにとっては宿泊先での滞在も楽しみの一つになっているようです。また、2回目からは仲間と一緒に飯田に連れて来て再会するなど、集いの場になっていたり、世界中で参加者同士の交流の場ができていたりするようです。今まで「伊那谷和太鼓コース」や、中級者以上からプロを対象としたハードなメニューの「ブートキャンプ」には、外国から千名ほどの人が来ていますが、和太鼓に興味があって、もっと勉強したい、もっと深く知りたいと思って飯田に来てくれることに、私もありがたく感じています。

— 2006年から自主企画のイベント「幸い下伊那和太鼓フェスティバル」(以下、幸い下伊那)が始まりましたが、そのきっかけは？

当時私は、和太鼓は伝統芸能としても日本の宝である一方で、芸術としてまだ理解されていないことを感じていました。和太鼓は無料で祭りなどで見たり聞いたりするもの、というような。それが悪いということではなく、私は芸術として観てもらえるチャンスを作りたい。外国では和太鼓は芸術として受け入れられていて、国によっては手厚く助成金がもらえるところもあります。当時飯田には世界的な演奏者が来れるようなシステムがなかったので、まずそういう人たちが来れる機会を作ろうと思いました。私には世界的な和太

鼓グループとのつながりがあったので、世界中にいる和太鼓奏者の演奏を観てもらえる場所として「幸い下伊那」を始めました。人気グループは1年以上先まで予定が入っているなか飯田市のホールは6カ月前からでないと予約ができないというハードルはありましたが、お互いの信頼関係の上で交渉して、実現できたステージが実はたくさんありました。

— 「幸い下伊那」をはじめとする飯田での公演では、お客さんはどのような反応ですか？

初めて和太鼓を「芸術」として感じられる方が多いみたいです。毎回足を運んでくださる方もいて、私も舞台から見て「あ、今日も来てくれている」とわかります。何回か来られるうちに一緒に手拍子をするなど演奏を覚えてくださって。そういう方がたくさんいるので「また来てくれてありがとう」と視線を合わせながらコミュニケーションをとっています。

— 演奏を通して、お客さんとの関係ができていますね。

そうですね。それと、「幸い下伊那」は「伊那谷和太鼓コース」の最終日に開催するのですが、その日の午前は「幸いフリンジ祭」としてアマチュアの和太鼓奏者やグループの方々や演奏するイベントも開催して、「伊那谷和太鼓コース」の参加者はそこで成果発表を行います。「幸いフリンジ祭」は、和太鼓を通してアマチュアで活動する方々の交流の場を作りたいと思い、2008年から始めました。フリンジ祭、ワークショップ、プロの和太鼓グループの演奏を楽しむスーパーショーなど、和太鼓を通して大きい祭りを開催したかったんです。

— 「幸い下伊那」でステージを楽しむ機会とともに、生徒さんたちの成果を披露する機会を提供されているんですね。外国で開催されているワークショップについても教えてください。

ワークショップは、アメリカ、ヨーロッパ、アジアやオーストラリアなど、世界30カ国ほどの国に参加者がいて、ほとんどの国に指導に行ったことがあります。それだけ、世界に和太鼓がある、ということです。

[ vol.2 ]

# アート・リーさん

世界各国  
を見てきた  
視点

[ 写真  
中央 ]



## 芸術に対してウエルカムな、世界的なまちをともに目指して

ー 飯田市を拠点に年に数カ月は外国で活動されていますが、飯田は外から見たとき、どんなところが特徴だと感じますか？

飯田市は、長野県の中でも5番目に大きい市とのことですが、まるで「村」みたい。県内のほかの市と比べると、時間の流れがゆっくりに感じます。大きい市になると、中心部は商業的な施設が集まり、郊外は農業の風景が多く見られるなど、分かれているように感じますが、飯田は産業や農業など、全部が混ざり合っているように感じます。また、外国の参加者から、ある印象的なことを聞きました。「日本の中でTOKARAがなぜ飯田にいるかがわかった気がする。飯田の雰囲気や空気感がとても美しい」と。実際に訪れてみて、美しいまちと感じている方が多くいるようです。

ー 最後になりますが、これから和太鼓奏者アート・リーとして、TOKARAとして飯田市でやってみたいことや展望などを教えてください。

ぜひ、芸術のまちを目指して行ってほしいです。今も、人形劇フェスタやオケ友が毎年開催されていることはすごく良いことだと思います。まちとしてもっといろいろな芸術に対してウエルカムな感じになっていたら良いなと思います。リニアの駅ができることも特別なことで、飯田市にとっては大きなチャンス。世界的な演奏から地元の方々の演奏、地芝居のような伝統的なものなど、幅広くいろいろなチョイスができて、いろいろなおいしい食べ物や芸術を味わい楽しみに来てもらえるまち。私は、そういう世界的なまちと一緒に目指していきたいです。同時に、今のようにゆっくりと生活できる場所であってほしいとも思います。今の良さも残しつつ、もっと世界のいろいろなものが入ってきてやすくなって、楽しめる。「飯田ならなんでもできる」というまちになって行ってほしいなと感じます。



PROFILE

アート・リー



1975年、スウェーデン生まれ、アメリカ・カリフォルニア州出身。18歳で聞いた和太鼓に魅了され、アメリカで和太鼓を始める。その後日本の和太鼓グループ・鬼太鼓座の日本ツアーに1年参加し、帰国。大学を卒

業後、1998年阿智村に來日。AETをしながら阿智村で地元和太鼓グループの指導も行き、御諏訪太鼓宗家・小口大八氏を迎えたコンサートなどを開催するなど活動을続け、2001年から飯田市在住。2004年、和太鼓の生徒とともに「和太鼓TOKARA」を結成。2005年、和太鼓界で最も權威ある『東京国際和太鼓コンテスト・大太鼓部門』において最優秀賞を受賞。現在も飯田市を拠点に世界各国で公演やワークショップを精力的に行っている。



EVENT REPORT

「取材」平松優子

## 地域の宝を守り、伝え、つなぐために 「伊那人形芝居保存協議会」研修会

### 四座で力を合わせ文化をつなぐ

人形浄瑠璃芝居は太夫と三味線、人形遣いの三業(さんぎょう)が一体となり、作り上げる日本の伝統芸能。江戸時代初期に大阪で生まれ、街道筋を通って全国へと伝わりました。その後、時代とともに各地の人形座が衰退していく中で、伊那谷では飯田市上郷の黒田人形保存会、同市龍江の今田人形座、阿南町の早稲田人形保存会、上伊那郡箕輪町の古田人形芝居保存会の四座が存続。個性あふれる舞台を守りつなぎながら伊那谷の人形芝居の歴史を今日に伝えていきます。

「伊那谷四座」と呼ばれるこれらの人形座が集結し、昭和59年に結成されたのが伊那人形芝居保存協議会です。年に一度の合同発表会で稽古の成果を披露するほか、技術向上のためにプロを招いての研修会を共同で開催。令和5年度は義太夫研修に人形浄瑠璃文楽座の鶴澤清志郎さん、三味線研修に同じく人形浄瑠璃文楽座の鶴澤寛輔さん、人形遣い研修に淡路人形座の吉田新九朗さんらを招いて研修会が開かれました。

取材に訪れたのは6月25日(日)の義太夫研修。講師の鶴澤清志郎さんは飯田市龍江の出身で、国内随一の人形浄瑠璃劇団「人形浄瑠璃文楽座」の義太夫節三味線奏者として全国の舞台上で活躍する人物。第一線のプロから直接稽古をつけてもらえる貴重な機会とあって、参加者は熱心に目と耳を傾け、練習に取り組んでいました。



人形浄瑠璃文楽座 義太夫節三味線方  
**鶴澤清志郎** つるさわせいしろう

1974年、飯田市生まれ。小学校時代は詩吟や舞踊を習い、竜峡中学校で「今田人形クラブ」、高校時代は「今田人形座」で人形遣いとして舞台に立つ。卒業後、国立劇場文楽研修生に。20歳で人間国宝の三味線方・鶴澤清治に入門、清志郎と名乗る。平成25年度大阪文化祭賞グランプリ、平成26年度咲くやこの花賞(演劇・舞踏部門)を受賞

## ほかにはない、伊那谷のすごさ

「私がこの道へ進む原点となったのは、竜峡中学校の『今田人形クラブ』です」と語る鶴澤さん。3年生の時にはクラブ長も務め、今田人形座の座長だった木下迪彦(みちひこ)さんから熱心な指導を受けていました。しかし、発表会を目前に控えたある日、木下さんが不慮の事故で他界。「先生の想いを僕たちがつないでいかなければいけない」との思いに突き動かされて「今田人形座」に入り、高校の3年間、人形遣いとして舞台に立ち続けました。

「卒業後、国立文楽劇場の研修生となりましたが、文楽に入門してくるのは、祖父や父、叔父など身内が人形浄瑠璃をやっているか、文楽をほとんど知らずに入ってくる初心者かどちらか。私のように地元の人形座を経験していた者はおらず、かなり特殊でしたね。今、外から飯田を見て感じるの『すごい土地だな』ということ。人形浄瑠璃、歌舞伎、奇祭など昔の文化がこれだけ残っている土地はあまりない。文化的なレベルの高さや知識欲の強さに加え、それを継承しているところ

がさらにすごい。長野県にあったほとんどの人形座が途絶えてしまう中で南信には4つも残っている。最後まで戦う南信の力強さみたいなものを感じますね」と鶴澤さん。伊那人形芝居保存協議会の研修で講師を始めて4年。「皆さん熱心ですし、それ以上に楽しんでくださっているのがうれしい。修行していると『楽しい』より『苦しい』が勝(まさ)ってしまうので、皆さんが純粋に楽しむ姿に私自身も救われ、刺激をもらっています」と話します。

抑揚や強弱、間の取り方で人物の心情や情景を伝えるのが義太夫の役目。参加者からは「普段はビデオやテープを使い独学で学んでいますが、細かい部分を汲み取るのは難しい。年に2回、生で指導してもらえるこの研修は貴重です」「プロからの本格的な稽古が地元で受けられるのはありがたいです」など喜びの声も。それぞれが真摯な姿勢で技術の向上に励み、文化の伝承に取り組んでいます。



# 新しい文化会館の整備検討状況 (令和5年4月以降)

## 飯田らしさを追求 感動の飯田ひろばを目指して

「舞台芸術の鑑賞と創造」「人形劇のまちづくり」の2つを柱としてきた飯田文化会館。建設から半世紀が経ち、市では令和9年度以降に新しい文化会館の工事着手を目指した長期財政計画を策定。令和4年6月に新文化会館整備検討委員会が発足し、検討を重ねる中、令和5年11月、新しい文化会館の基本理念が形になりました。

令和5年  
5/19(金)

## 第6回 整備検討委員会

### 飯田らしい表現活動とは ～これまでとこれから～

第5回までにまとめられた「飯田らしい公立劇場の役割」について振り返った後、検討委員会の市民委員と学識委員からの話題提供をもとに、飯田らしさを3つのポイントにまとめ、委員たちの間では、飯田らしい表現活動とは何か、意見交換がされました。

飯田らしさ 1	地域の文化的な土壌の上に 外からの文化を吸収し、独自に展開
飯田らしさ 2	市民主体の文化活動
飯田らしさ 3	専門家とのつながり

令和5年  
7/7(金)

## 第7回 整備検討委員会

### 基本理念・活動を実現する機能、空間とは

「基本理念・活動を実現する機能、空間とは」をテーマに、「鑑賞」「創造」「交流」の3つの観点に分けて、飯田らしい機能や空間のあり方を議論。第6回整備検討委員会でまとめられた「飯田らしさ」と、これまでに出された「集う」「創る」「伝える」「感動する」のキーワードを踏まえた意見交換がされました。

### 共有された意見

- 日常と結びついた機能性や空間性  
…… 半屋外(公園・広場)、屋外的な空間
- 創作活動が起こるような空間性  
…… 工房、ものづくり工房
- »» 「非日常的なホール」と  
「使い勝手のいいホール」のバランス

## 新しい文化会館の基本理念

### みんなが集い、創り、伝える、感動の飯田ひろば



## 令和6年度 飯田文化会館事業計画

4月	人形劇定期公演
5月	人形劇定期公演
5/3~6	オーケストラと友に音楽祭2024
5/19	コンサートア・ラ・カルト VOL.78「フレッシュ・コンサート」
5/26	オーケストラと友に音楽祭 基礎コース
7月	にこにこステージ vol.69
7月上旬	森のかみしばい劇場
7月中旬	プレフェスタ 2024
8/1~4	いいだ人形劇フェスタ2024
9月	コンサートア・ラ・カルト VOL.79「秋の彩コンサート」
9月	にこにこステージ vol.70
9月	人形劇定期公演
10月	ダンボールししまいワークショップ
10月	人形劇定期公演
11月上旬	人形劇 in 丘のまちフェスティバル
11/3・10・17・24	第37回 伊那谷文化芸術祭
11/29・30	せかいの劇場
12月	コンサートア・ラ・カルト VOL.80「クリスマスコンサート」
12月	にこにこステージ vol.71
12月	人形劇定期公演
12/1	森のぼかぼかクリスマス
12/12	キーウ・クラシック・バレエ公演
12月下旬	ましゅ&Keiのクリスマス会
1月	人形劇定期公演
1月上旬	初春を寿ぐ 竹田人形館
2月	人形劇定期公演
2月上旬	りんごっこ劇場
3月	にこにこステージ vol.72
3月	人形劇定期公演
通年(5月~10月)	人形劇講座 初級コース
通年	人形劇講座 サポートコース、ユースクラブ
秋頃	第45回 市民落語鑑賞会 おいでなんしょ寄席
秋頃	飯田信用金庫presents 第21回萩元晴彦ホームタウンコンサート

令和5年  
7/11(火)~

### 現飯田文化会館利用団体との 報告・意見交換会

7月11日から5回にわたって、飯田文化会館を利用する団体の皆さんとの意見交換会を飯田文化協会と共に開催しました。延べ20名(17団体)の方にご参加いただきました。

これまでの検討状況をお伝えした後に意見交換を行い、「舞台機構の充実」「舞台と同じ広さのリハーサル室」「誰もが集える空間」など、検討委員会と同様のご意見が多くありました。

令和5年  
9/5(火)

### 第8回 整備検討委員会

#### 飯田らしい施設と事業

～基本理念・活動を実現する施設機能と必要とされる事業とは～

これまで積み重ねてきた議論の内容に加え、7月に実施した飯田文化会館を利用する団体の皆さんとの意見交換会で出された意見も反映した、基本理念・基本方針(案)を提示。その後、前回議論した「鑑賞」「創造」「交流」を実現する機能や空間のあり方を振り返り、それらをさらに深掘りした意見交換を行いました。

#### 新しい文化会館の活動の先に・・・

#### 「ひと」を育み 「まち」を育み 「活力」を生み出す

令和5年  
10/17(火)  
10/31(火)

### 「感動の飯田ひろば」「伝える」 アイデア出し意見交換会

2回にわたり、飯田市を拠点に活動するデザイナーやカメラマンなど広報に携わる方たちとの意見交換会を開催し、延べ14名が参加。文化活動の発表・発信、伝統芸能・文化活動の継承、積極的な情報発信をどう展開するか、文化会館や文化活動に関心のない方に対してどう接触し楽しさを伝えられるかなどの意見交換をしました。

「現状ある施設の役割を振り返ることも大切」「集客できている施設のやり方を検証する」「文化会館に来たくても来ることができない課題を排除する対応をし、多様性を認め合う地域性を育むことが大事」などさまざまな視点から意見が出されました。

令和5年  
11/6(月)  
12/7(木)

### 第9回 整備検討委員会 第10回 整備検討委員会

#### 基本構想(素案)の検討

今までの委員会を振り返りながら基本構想の素案を検討。

委員の間では、「文化＝遊びであり、楽しむことを伝えられないか」「文化会館は、飯田のまちづくりの中でどんな位置づけになるのか」「これからは日常的にいろいろな人が顔を出せる場所になってほしい」など、さまざまな意見が交わされ、新しい文化会館の整備に関する基本構想(案)と、基本理念「みんなが集い、創り、伝える、感動の飯田ひろば」(左記図解イメージ)が検討されました。

情報誌のタイトル「toi toi toi(トイトイトイ)」。幸運や成功を祈るドイツの「おまじない」で、世界中の舞台で使われている言葉です。開演直前に誰もが緊張している中、舞台上や舞台袖で「うまくいくよ!」「大丈夫!」と、仲間の成功や幸せを祈り「toi toi toi」と声を掛け合います。

このタイトルには、「to i」愛の方へ、私(I)の方へ、飯田(IIDA)の方へ、人の方へ、という意味も込められています。

新文化会館整備検討委員会やワークショップで出された「みんなが(誰もが)集う」「ワクワク感」「楽しむ場」「飯田ひろば」の実現を願い、みんなで共有できる掛け声としてtoi toi toi!

## 私たちと一緒に情報誌をつくりませんか

飯田文化会館では、情報誌の制作や広報活動にご協力いただける方を募集しています。企画・取材をはじめ、情報発信など、私たちと一緒に広報活動をしませんか。ご興味のある方は、飯田文化会館まで、お気軽にお問い合わせください。また、あなたの飯田文化会館での思い出や、その他情報をお待ちしています。

✉ [shinbunka@city.iida.nagano.jp](mailto:shinbunka@city.iida.nagano.jp)

飯田文化会館 情報誌 toi toi toi! 2号

2024年3月発行

制作 | 飯田文化会館

〒395-0051 長野県飯田市高羽町5丁目5-1

TEL. 0265-23-3552

企画・編集 | toi toi toi! 制作チーム

デザイン | 北林 南 (合同会社 伊那谷サウンド)

イラスト | オリハラ ケイコ